

カッシーラーによるシャフツベリ美学の評価について
——シャフツベリ研究の中間報告もかねて——

浜 下 昌 宏

Summary

Cassirer's Evaluation of Shaftesbury's Aesthetics

Masahiro Hamashita

This is one of the series of study of Shaftesbury's influences on modern aesthetics. In Shaftesbury studies, the hardest question is why he was mostly neglected in England while he was so much appreciated among German thinkers such as Herder, Hamann, and many others. The hint as to the question may be found in Cassirer's accomplishments. Ernst Cassirer can be said to be the first historian of modern philosophy that located Shaftesbury properly in the modern development of aesthetics. Through researching his *Freiheit und Form*, *Die Philosophie der Aufklärung*, *Die platonische Renaissance in England und die Schule von Cambridge* and some other works, I understand that his high appreciation of Shaftesbury's aesthetics is based on his deep knowledge of Platonistic tradition and Western humanism, and on his study of modern philosophy, in particular Leibniz (theories of monad and optimism). Cassirer's concept of culture is so comprehensive as to explain the context of the emergence of modern aesthetics, the center of which Shaftesbury is situated.

序：私のシャツベリ研究における本稿の位置

I : カッシーラーのシャツベリ解釈との出会い

II : カッシーラーの著作に即したシャツベリ論の概要

III : カッシーラーによるシャツベリ受容・評価の論点総括

[序]

イギリス近代美学において、さらに西欧近代美学の成立において、第三代シャツベリ伯(1671-1713)が果たした役割とはどのようなものであったか。——この研究テーマが、イギリス近代美学史に関する私の基本研究のひとつである。その追究に必要な基礎的作業とは、まず、次の2点であった。

1, シャツベリ美学の解釈

2, 西欧近代美学の定義

共にいまだ結論に達していない課題ではあるが、1については「シャツベリにおける自然と芸術——芸術家の道徳的性格について——」(今道友信編『美学史研究叢書』第6輯、東京大学文学部美学芸術学研究室、1981), 「シャツベリ」(今道友信編『西洋美学のエッセンス』ペリカン社、1987, 1994) および、『18世紀イギリス美学史研究』(多賀出版、1993) 所収の4論文(「シャツベリの〈無関心性〉概念——Stolnitzの論考をめぐって——」「モラル・センス」「シャツベリの〈芸術〉理念」「造形芸術論——第二記号としての画像」), さらに“Conception of ‘the Whole’ in Shaftesbury’s Aesthetics”(Aesthetics, 6, 1994) の諸論稿によって追究を続けてきた。さらにまた、シャツベリの全著作の邦語訳の作業も継続中である。この翻訳という作業は、彼の英語の読解困難性によって難儀を極めてはいるが、まさに「解釈」=「翻訳」(interpretation) ゆえに、不可欠の重要性を有する。

2については、上記『18世紀イギリス美学史研究』および、「〈崇高〉美学の系譜——アディソンとシャツベリまで」(『神戸女学院大学論集』第112号、1992) などがその成果の一部であるが、いうまでもなく、私が特に研究対象としてきたイギリス近代美学以外にも、18世紀のドイツ、フランスなどの美学の研究が不可欠である。しかし、 性急に近代美学の定義を求めることは課題としても壮大すぎ、また私の本意ではない。研究の道筋としては、1と2とを関係づける形で、美学におけるシャツベリの影響の軌跡を辿りながら、近代美学の本質ないし特徴を規定することが、私の目論みである。

そこで、シャツベリがどのように同時代および近代美学の発展において影響力を發揮したかについて、次の2点が研究課題となった。

3, シャツベリとイギリス国内の美学、特にスコットランド美学との関係

4, シャツベリとドイツ・フランス等の大陸美学との関係(シャツベリと近代美学成立との関係)

3については、『18世紀イギリス美学史研究』所収の、ハチソン、ジェラード、キャンベル、リーードについての論考や、さらにターンブルについての2つの論文、すなわち、"A Quest for the Universal—George Turnbull's Conception of Painting (1)" (*Kobe College Studies*, Vol. 42, No. 1, 1995) と、"A Quest for the Universal—George Turnbull's Conception of Painting (2)" (*Kobe College Studies*, Vol. 42, No. 2, 1995) が研究成果である。また、論文による発表は今後の仕事であるが、モールズワース、アーバックル、ケイムズ卿等についての研究資料の収集・読査も継続中である。

そして、現在進行中の研究はとくに4についてであり、構想としては、人物との関係から国別（オランダ以外は言語圏別でもある）を原則として、次の4a～4eの5部に分けて順番に作業を続けている。

4a, ドイツ：研究予定の内容については本文で後述。

4b, フランス：ピエール・コストとの交信や、特に*Principes de la philosophie morale ou Essai sur le mérite et la vertu par mylord S**** [Shaftesbury], Amsterdam, 1745. を翻訳、出版したディドロへの影響が興味深いが、さらにまた、ピエール・ペイル、ジャン・ル・ルクレール、その他の人々との交流を跡付ける必要がある。その際、次の研究は有益であろう。

Rex A. Barrell, *Anthony Ashley Cooper, Earl of Shaftesbury (1671–1713) and 'Le refuge français' – Correspondence*, The Edwin Mellen Press, 1989.

4c, オランダ：オランダに亡命していた、上記ペイルやル・クレールとの交流に関して、当時のオランダの宗教的・文化的位置や出版事情が、シャフツベリの思想的立場とどう関わっているかは重要な研究主題である。

4d, イタリア：ナポリはシャフツベリの終焉の地であり、最晩年の彼はその地でパオロ・デ・マテイスなどの芸術家のパトロンとなつては自らの芸術論を書き続けていた。次のような研究が方向付けに示唆を与えてくれるであろう。

Kerry Downes, "The publication of Shaftesbury's 'Letter Concerning Design'", *Architectural History*, 27, 1984.

Evonne Levy, "Paolo de Matteis, 1662–1728", in *A Taste for Angels: Neapolitan Painting in North America 1650–1750*, Yale University Art Gallery, 1987.

Sheila O'Connell, "Lord Shaftesbury in Naples: 1711–1713", *The Walpole Society*, Vol. LIV, 1988.

Livio Pestilli, "Lord Shaftesbury e Paolo de Matteis : Ercole al bivio tra teoria e pratica", *Storia dell'Arte*, 68, 1990.

4e, スペイン：直接的にはシャフツベリとの関係は薄いが、しかし、次のような研究成果は、シャフツベリの思想的影響関係に新たな領域を開いてくれるであろう。（いずれも私家版。）

Pablo Arnau Paltor, "Shaftesbury : El problema del mal y la estética"

Jorge V. Arregui e Pablo Arnau, "Bibliografía sobre las relaciones entre la estética británica y la española en los siglos XVII y XVIII" (Septiembre de 1993)

本稿は、4aの課題、すなわち、ドイツ（語圏美学）におけるシャツベリの影響の研究の一部である。

シャツベリに対する同時代のドイツにおける関心は高く、Paul Ziertmann ("Beiträge zur Kenntnis Shaftesburys", *Archiv für Geschichte der Philosophie*, Bd. 17 <n. F. X>, 1904.)による調査によれば、18世紀中にすでに次のドイツ語訳が出ている。

1738 : *Unterredungen mit sich selbst.* Venzky 訳。

1745 : *Die Sittenlehrer.* 訳者不明。

1747 : *Untersuchung über die Tugend.* Spalding 訳。

1768 : *Characteristicks, oder Schilderungen von Menschen, Sitten, Meynungen und Zeiten.* Wichmann 訳。

1776-79 : *Des Grafen von Shaftesbury philosophische Werke.* Hölty u. Benzler 訳。

また、周知のように、ドイツの思想家へのシャツベリの影響は顕著である。カントを例外とすれば、ヘルダー、ハーマン、メンデルスゾーン、モーリッヒ、といった思想家、また、文芸作家でもあったシラー、ヴィーランドなどの著作には、シャツベリへの敬意に満ちた言及をみることができる。個々の思想家・作家とシャツベリとの思想的関係についての研究は別の課題であるが、それにしても不思議なのは、なぜドイツにおいてこのような大きな影響をシャツベリが与えたのか（一方において本国イギリスではほとんど黙殺されたのにもかかわらず）、ということである。たしかに、次のような先駆的歴史研究ではすでにシャツベリの近代ドイツ美学史における影響力を積極的に認めている。

K. Heinrich von Stein, *Die Entstehung der neueren Ästhetik*, Stuttgart, 1886.

Oskar F. Walzel, "Shaftesbury und das deutsche Geistesleben des 18. Jahrhunderts", *Germanisch-Romanische Monatsschrift*, 1, 1909.

Christian Friedrich Weiser, *Shaftesbury und das deutsche Geistesleben*, Leipzig u. Berlin : Teubner, 1916.

しかし、上記のうち Walzel のもの以外は、シャツベリ思想のいっそう深い解釈とともにそのドイツでの影響力の内容を追究するためには、不十分な示唆しか得られない。そこで、さらなる導きを求めたのが、本稿による、カッシーラーのシャツベリ評価の研究である。私の見るところ、現代においてシャツベリの美学史的意義を最も高く、そして最初に総括的に評価したのがカッシーラーそのひとであると思われ、その後のシャツベリ研究史においても、彼ほどの透徹した評価を示したものがあるのか疑わしい。

ところで、本稿の狙いは、あくまでもカッシーラーによるシャツベリ評価の具体的内容の確認にあり、その評価を可能にしたカッシーラーその人の思想の研究にはない。むろん、本稿の副産物としては、カッシーラーの思想とシャツベリ評価との関係が示唆されるであろう。たしかに、彼の業績を二分して、科学的認識・知識論研究と西洋文化史と文化批判とに分ける

ならば、カッシラーのシャツベリへの肩入れは後者の延長上にあるものである。

[I] カッシラーのシャツベリ解釈との出会い

個人的な回想であるが、修士論文でシャツベリに取り組んでいた頃、当然ながらカッシラーの研究に出会った。とりわけ『啓蒙主義の哲学』の中での、近代美学の創始者と位置付けるシャツベリ評価は衝撃的であった。しかし、最初は、その書での、出典を明記しない論述のスタイルに不安を感じたこともあり、内容的にはやや乱暴な解釈ではないかと思ったものである。ところが、私自身の研究が進んでいきある到達点が得られたとき、そのとき初めて、さながらいわゆる目からうろこが落ちるかのように、カッシラーの解釈の深さに思い至ったのであった。その具体的経過を記しておこう。

シャツベリの自然像は、彼の歌うような自然讃歌を読むと、神的な内在を主張する立場であるアニミズムとも汎神論とも理解できそうであるが、一方で自己主体 (self-identity) の根拠についての議論で展開される超越的「一者」の存在の位置付けも難しく、結局のところ、そうした内在と超越を結ぶ概念の評価が問題となる。彼に影響を与えたケンブリッジ・プラトニストのうち、カドワースには「造形的自然」(plastic nature) という概念があり、もしシャツベリにもその概念の継承があれば、問題解決の糸口が与えられることになる。「造形的自然」は、神が世界の上に超越的原理として君臨するのに対して、世界の中で作用すると推定される。シャツベリのテキストにも、たしかに、2度ほど「造形的自然」という表現が使われているが、それが彼の思想の根幹にどこまで関わっているのかは不確定である。そこでカッシラーは、シャツベリの「内的形」(inward form) という観念に注目して、それによって神的美の内在性を構造付けて自然の中に上位と下位、内と外との区別を主張する、と解釈する。この解釈に対して、私の第一印象は、オルドリッジによる批判に同意して、その解釈の根拠を理解できなかったのである。つまり、オルドリッジの言うように、「内的形」とは精神の美であるとする理解に止まっていた。ところが、私がテキストの解釈をさらに進めて、芸術家と至高美たる神との関係や、芸術家による創造の意味を考察すると、芸術家の創造が、プラトニズムの論理を援用した、至高美への登高を意味し、それは同時に本源的一者である神への自己同一性追求の行為でもある、という理解を得た。つまり、「内的形」は単に分析的に外的形と区別されるのではなく、神による自然創造を模倣する芸術的創造は、美という結実を介して、その創造行為の動的性格を明確にする。したがって、「内的形」はむろん精神的な実体・精神的美であるが、その精神は本源的精神を分有することによって美なのであり、精神が外的世界に対して支配するという能動性を有する証拠となっている。こうした理解への導きをしてくれたカッシラーの深い読み取りに、私は感服したものである。(この議論は『18世紀イギリス美学史研究』の第2章、C 「シャツベリの <芸術> 理念」において詳論されている。)

[II] カッシラーの著作に即したシャツベリ論の概要

さて、カッシラーの著作のうち、シャツベリを論じた、あるいは評価を含めた参考があ

るのは、現在の調査のかぎりでは、発表年代順に挙げて次の8点の著作である。

- 1, 〈A7〉 *Freiheit und Form, Studien zur deutschen Geistesgeschichte*, Berlin, 1916, 2nd ed. 1918 ; 3rd ed. 1922 ; repr. Darmstadt : Wissenschaftl. Buchgesellschaft, 1961, 1971, 1975. [中埜肇訳『自由と形式——ドイツ精神史研究——』ミネルヴァ書房, 1972]
- 2, 〈C36〉 "Shaftesbury und die Renaissance des Platonismus in England", *Vorträge der Bibliothek Warburg*, 9, 1930/31. (Leipzig u. Berlin : Teubner, 1932.) [根占献一訳「シャツベリと英国におけるプラトン主義ルネサンス」(佐藤三夫ほか訳『シンボルとスキエンティア』ありな書房, 1995, 所収)]
- 3, 〈A20〉 *Die Philosophie der Aufklärung*, Tübingen, 1932. [The Philosophy of the Enlightenment, tr. by Fritz C. A. Koelln & James P. Pettegrove, Princeton U. P., 1951 ; Beacon Paperback, Boston, 1955；中野好之訳『啓蒙主義の哲学』紀伊國屋書店, 1962。Kap. 7 Grundprobleme der Ästhetik は独立して次の書として再版。Grundprobleme der Ästhetik, Berlin : Alexander Verlag, 1989. (hrs. v. Hein Stünke, Schriften zur Kunsththeorie V)]
- 4, 〈A21〉 *Die platonische Renaissance in England und die Schule von Cambridge*, Stud. d. Bibl. Warburg, Bd. 24, Leipzig u. Berlin : Teubner, 1932. [The Platonic Renaissance in England, tr. by J. P. Pettegrove, Edinburgh, London, et al : Thomas Nelson and Sons LTD, 1953；花田圭介監修, 三井礼子訳『英国のプラトン・ルネサンス——ケンブリッジ学派の思想潮流——』工作舎, 1993]
- 5, 〈C51〉 "Schiller und Shaftesbury", *Publications of the English Goethe Society*, NS 11, 1935 (Cambridge U. P.).
- 6, 〈A27〉 *Thorilds Stellung in der Geistesgeschichte des 18. Jahrhunderts*. (Kungl. Vitterhets Historie och Antikvitets Akademiens Handlingar, Vol. 51 : I) Stockholm : Wahlström & Widstrand, 1941. スエーデン人のトマス・チューリルド (1759–1808) はルンドとウプサラで法律を学び, イングランドに旅しフランス大革命にも共鳴する。ルソーやゲーテに影響を受け, フランス古典主義に反対するドイツ初期ロマン派の精神を共有してスエーデンのシュトルム・ウント・ドランクの中心人物となった。シャツベリにも心酔していた。北欧におけるシャツベリの影響を考える上では不可欠の思想家である。が, 本稿ではこの論文は取り上げない。
- 7, 〈A29〉 *An Essay on Man —— An Introduction to a Philosophy of Human Culture*, Yale U. P., 1944. [宮城音弥訳『人間』岩波現代叢書, 1953]
- 8, 〈D19〉 "Ficino's Place in Intellectual History" (review of P. O. Kristeller, *The Philosophy of Marsilio Ficino*. New York, 1943), *JHI*, 6 (1945).

各文献名の冒頭に付けた〈A7〉〈C36〉といった記号は、カッシーラーについて、現在利用可能

な最も充実した書誌である次の書の分類番号である。今後の研究の便宜のために付けておく。

Walter Eggers & Sigrid Mayer, *Ernst Cassirer : An Annotated Bibliography*, N. Y. & London : Garland Pub., 1988.

さて、以下において順次上記の各書や論文のなかのシャフツベリ論を取り上げながら、カッシーラーによるシャフツベリ理解、解釈、評価の内容を吟味したい。なお、今回の調査で参照できなかった書もあり、また、言及の程度から、必要がないと判断したものについては6の文献のように取り上げなかった。要点の摘出には主として翻訳の頁数を記しておく。文献2と5については、上記 Eggers & Mayer の簡潔な要約を訳出しておいた。*印の付いた文は私による補足ないし評言である。

シャフツベリとドイツ美学との関係を探るという主旨をたえず念頭において、その点でのカッシーラーの論述を注目することにしたい。重要度を考慮して、まず単行研究書、次に論文という順序で取り上げていく。

1. *Freiheit und Form*

コルフは『ゲーテ時代の精神』第1巻（永松譲一訳、櫻井書店、昭和19年：Hermann August Korff, *Geist der Goethezeit ; Versuch einer ideellen Entwicklung der klassischromantischen Literaturgeschichte, 1 Teil : Sturm und Drang*）において次のように述べている。（邦訳、p. 149 f.）自然の新しい神化は、1) 神感情から（東方のキリスト教の歴史）、2) 自然哲学から（西方）の二方面から生まれる。この非合理主義の世界観の成立史たるドイツ観念論の前史については、カッシーラー『自由と形式』は有望な端緒を開いている。観念論的な世界観の哲学的前史として、1) ライプニッツ、2) シャフツベリ、3) スピノザがいる。ライプニッツは個人主義的に理解された宇宙靈化の近代における創始者、スピノザは宇宙神化の近代における創始者であり、そしてシャフツベリは、18世紀を権威を以て規定した「精神の仲介者」である。この精神の内部において宇宙靈化と宇宙神化との理念が美学的な世界観として文学史的に有力となる。疾風怒濤の世界感情が哲学的に名付けられるのはライプニッツ、スピノザそれ自身ではなく、ライプニッツ的に解釈されたスピノザ主義、すなわち主意主義的かつ個人主義汎神論となる両哲学者の融合である。シャフツベリの意味は彼の世界観がかくのごとき融合のしかも通俗的形式における最初の実例をなしている点にある。この通俗的な形式において彼の世界観は文学史一般によって初めて受け入れられることができた。

『自由と形式』第1章「ライプニッツ」（邦訳、p. 18～）——ライプニッツを次の2点から評価する。(1)普遍と具体とを共に生かす論理を提示していること。

*この点は、シャフツベリ評価である天才（普遍）概念と作品（具体的個別）との関係を示唆している。また、直觀概念に含意されている、個別的感性的側面と直觀内容の普遍性との関係にも及ぶであろう。

ライプニッツ評価の(2)は最善説である。（邦訳、p. 26～）——神の位置づけと、ルターの宗教改革のプロテスタンティズムによって排除された人文主義の擁護、すなわち思惟の自立を擁護

する。プロテスタンティズムとは、現実が常に非合理な神の干渉と意志決定に対して開かれたままになっていることによってのみ現実の宗教的な性格が認められることを意味する。それに対して、ライプニッツでは、あらゆる特殊な奇蹟は唯一の普遍的な奇蹟のなかに、つまり理性そのものの奇蹟のなかへ解消される。「現象生起の秩序を廃棄することではなくて、この秩序が損なわれずには存続することこそ、宇宙が神の中に宿っていることを告知するもの」(p. 26)。「天の運行を正しく観察するためには、太陽を見すえなければならないこと、そうして初めてすべてがすばらしく美しい姿で立ち現われることを遂に発見した後では、いわゆる無秩序や混乱は私たちの知性のせいであって、自然のせいではないということが判るであろう」(p. 27)。——*科学的観察と哲学的観想とがあいまって世界の美(=秩序)の認識に至るという思想である。シャフツベリでは科学的観察の契機が全面には出ないが、その点がライプニッツとの最大の違いであろう。

第2章「美的形式界の発見」(邦訳、p. 54～)——ライプニッツ哲学のなかでは美的・美学的な要素には決定的役割を与えられていない。美学の体系はバウムガルテンをまつて初めて可能となつたが、ただしそれは芸術や現実に関する新しい視点から生まれたのではなく、認識能力の新しい捉え方から出発する。つまり、下級認識能力の相関者としての感性的快としての美を問題とする。しかし、ライプニッツの哲学には、スイス派やバウムガルテン、マイヤーには展開されていなかった要点があった。彼のモナド論において、感性界と知性界、物質的なものと精神的なものは、非連続の並行関係にも相補的関係にあるのでもなく、最初から一方は他方の表現として存在している。「すべての内的なものは外的なものであり、同じようにすべての外的なものは内的なものである」(p. 70)。近代哲学の力学的説明ですべてとはしない。力のエネルギーを形成力として捉える。そこで、「原因の系列と目的の系列、機械的な生起の系列と力動的な生起の系列、物体的・有機的な諸形態の系列と生命の系列は単に外的に同調し合っているのではなくて、端的に同一のものである。現象生起の形而上学的な統一は必然的に両方の契機を要求する」(p. 71)。その統一としての存在=モナドは、個別的な生命形態の無限の総体として表現される。ここから、美学への架橋が展望できる。すなわち、「美的なものが先ず関連を持つところの感性的な領域は、今ではもはや單に根源的・精神的現実の脣と見なされることはできず、この現実そのものの必然的な表現だからである。この現実を相互に引き裂かれ孤立した諸規定においてではなくて、ひとつの眞の全体として把握するひとにとっては、現実自身の中に〈精神的なもの〉が、即ち一切を包括する宇宙生命の像がくっきりと浮彫りにされるのである」(p. 71)。こうしたライプニッツの思想の背後にある近代プラトニズムはフィチーノからケンブリッジ・プラトニストまで様々な現れ方をしたが、18世紀では本質的にシャフツベリの思想に集約されている。ライプニッツが形而上学の体系家として概念的に演繹しようとした宇宙と生命の理論は、シャフツベリにあっては自由な芸術的形態と新しい哲学的様式で論じられる。「純粹の理念哲学が近代的自然感情という内実によって」(p. 72) 表現される。シャフツベリの自然讃歌は、ルネサンスが開始した精神的解放の作業の完成に見え、中世的な、自然と神、感性的なものと精神的なものとの二元的対立の止揚を思わせる。新しい宗教感覚は造物

主をただその被造物のなかで知り崇敬する。自然に見られる「浪費と集積、充実と節度が自然の根本性格であると同様に美の根本性格でもある。可視的な形態の美は内部から作用し形成する衝動の均衡にもとづく。美は〈形式〉(Form) である」(p. 73)。

こうしたシャフツベリの思想がライプニッツと異なる点は、美の概念が中心的な問題であるか周辺的にすぎないかにある。シャフツベリにとって「美は完全性および〈合目的性〉といふ一般概念の個別例および特殊例をなす」が、ライプニッツには美はむしろ「目的考察の全体がそこから発して内的な変革を経験する最高規範となる」(p. 73)。シャフツベリの所論はプラトン、プロチノスからケンブリッジ・プラトニストに至る思想のどれにも範型が認められて特に新しいものではないが、深い影響力をもったのは「新しい世界感情を与えるような極度に集中された迫力」(p. 74) をもって語られたからである。そしてこの感情は、ドイツ古典主義美学の思想家たち、ヘルダー、ゲーテ、モーリッツ、シラーにおいて展開されていくのである。

*ライプニッツとの関連でシャフツベリの思想史的・美学史的意義が鮮明に論じられる。まさに思想史家カッシーラーならではのシャフツベリ評価である。

3, *Die Philosophie der Aufklärung*

Max Dessoir は、ZAAK, 28 (1934) におけるこの書の書評で、シャフツベリを論じた部分が本書の白眉と評価している。

第2章「啓蒙主義哲学思想における自然および自然認識」5 (邦訳, p. 103ff; 英訳, p. 84f.) ——ライプニッツは、ケンブリッジ・プラトニストのモアとカドワースによる「造形的自然」(plastic nature) 概念を斥けて、同じようにデカルトによる機械論や作用因の偏重を批判するのにモナドの観念を以て行なった。すなわち、モナドの作用は目的論的連環であり、数学的自然説明と並んで、新たな有機体哲学の根底を成す。こうした哲学は、自然を芸術作品のような有機的統一的全体として見る立場によって可能になるのであり、美学的世界觀を意味する。調和の概念もそこで重要である。シャフツベリは、自然観の形成において、機械論を完全に排して、美学的世界像に依拠する。彼はケンブリッジ・プラトニストの「造形的自然」を承けつつ、その神秘主義的帰結は拒否し、「純粹な形式概念をその精神的な〈超感性的〉源泉にいて認識すると同時に、一方ではそれにもかかわらずこの概念がその純粹な直観的規定を依然として保持するように工夫」した。「シャフツベリはこの世界をひとつの芸術作品とみなし、そこからこの芸術作品を作り上げた芸術家、すなわちその作品のすべての形のうちに直接的に臨在している芸術家へとさかのぼっていく。この芸術家はなんらかの外的な手本に従って行動してこの模型をただ写しとるのではなく、またその創作において或る特定のあらかじめあたえられた計画に従うのでもない。彼の営む作用は純粹に内在的に決定されたのであり、従って外的事象、すなわちひとつの物体の他物体への作用などからの類推によっては説明されえない。かくしてシャフツベリの世界觀全体を支配し貫徹している目的概念も、今や同様に新しい局面と新しい意味とをもつようになった。ちょうどわれわれが芸術創造と鑑賞においてけっして外的目的に支配されないで、むしろ行為の目的を純粹に行行為そのものに、すなわちそれ自身としての創造と

直観に見出すのと同じように、自然の〈天才〉についても同様なことがあてはまる。天才はそれが活動することによってのみ存在するが、その本性はなんらかの具体的な作品に、あるいは、その作品の無限の多様性に還元されてしまうのではない。この本性はただ作用し形成するという行為においてのみ表現される。そしてこの行為はまた、すべての美の源泉に他ならない。〈美しくされたものではなく美しくするものこそ真に美しい存在である〉。彼の美学から発するこの目的内在性(immanent purpose)をシャツベリは自然哲学において貫くことによって、新しい根本的な知的傾向をそこに作り出したのであった」。

*ケンブリッジ学派の「造形的自然」の概念は理神論的と言うならば、シャツベリの立場は万有内在神論と呼べるだろう。

「シャツベリにあっては、低級なものと高級なものとの、最高にして神聖な力と、自然の〈鬼神的〉(デモニッシュ)なもろもろの力とのかかる対立もまた消滅する。彼は全のうちに一を見出し、一のうちに全を見出す。美の内在性のこの立場にとっては自然においてもやはや上位と下位、内と外というような区別は存在しない。なぜならば彼岸と此岸という絶対的な対立は今や止揚されたからである。〈内的形式〉(inward form)の概念はこの種のすべての対立を克服した。なぜなら、ゲーテの言葉にあるように〈外部で妥当したものは内部でも同じように妥当するということが自然の内容だからである〉。そこでカッシーラーは、この側面からのシャツベリのドイツへの影響を高らかに宣揚する。「自然に対する新しい感情の力強い流れがここから18世紀の精神史に流れ込んだ。シャツベリの自然讃歌は特にドイツ精神史の発展に決定的な影響を及ぼした。ヘルダーや若いゲーテの自然観を形作ったあの根源的な力を解放したのは実にシャツベリの自然観に他ならなかった」。

第4章「宗教の理念」1(邦訳, p. 186ff; 英訳, p. 152ff.)——啓蒙主義の通俗哲学が快不快に拠る倫理的・宗教的幸福観を展開したときに、合目的性の観念を立ててカントの先鞭を付けて弁神論の問題に新しい視点からの追究をしたのが、美学からはシャツベリ、そして法と国家論からはルソーであった。シャツベリは美学の問題と弁神論とを最初に結びつけた思想家である。「彼が打ちたてた哲学においては、美学は単に体系内におけるひとつの部分領域ではなく、全体系のうちに真に核心的な位置を占めるものであった」。美は真理であり、真理は基本的に形式としての意味、つまり美としての意味によって把握される。「すべて現実的なものは形式を有しており、不恰好な混沌たる塊りではなくて内面的な均整がとれたものであること、それは静止においては確たる形態をもち生成と運動においては律動的な秩序と規則を保つこと、このような基本的現象のうちにこそ、現実のもつ純粹に精神的で〈超感覚的〉な起原が直接的に開示されている」。感官にはそれが開示されておらず、したがって動物にはそうした形式の認識の能力はない。その認識は欲望のような直接的反応から離れ、「すべての所有欲から離れ対象の直接的所有と一切無関係な純粹な観想から発する」。「あらゆる〈関心〉から離れたこの純粹な観察と喜悦の機能のうちに、シャツベリはあらゆる芸術的享受と芸術的創造を支える根源的な力を見出した」。そこにこそ人間本来の幸福があり、シャツベリは狭い弁神論、つまり世界の善惡計算や人生の快樂による宇宙の意味ではなく、生の形式を生み出す形成力の純粹な

エネルギー（自由で内面的な形成作用）の視点から、存在の窮屈的な是認をもたらす眞の弁神論を立てている。「単なる享樂を一切顧慮せず、それとなんら共通のものをもたぬこのプロメテウス的な活動が、人間の眞に神的な性格と、それを通じて宇宙全体の神性とをわれわれに開示する」。

第7章「美学の基本問題」4「直観の美学と天才の問題」（邦訳、p. 387ff；英訳、p. 312ff.）——18世紀イギリス美学の真価は、フランス古典主義における、自然模倣の法則を確立した美的客觀性の議論の方向でも、また、心理学的に趣味判断の分析をめざす経験論にもなく、シャフツベリの美の直観による美学にみられる。「眞の人間形成とは何か、個人の内的・精神的宇宙を支配する法則とは何か、という問いに答えるために彼は美の理論を追究」した。真理は概念的把握にあるのではなく、宇宙の内的な意味連環を直接体験し直観的に理解することによって得られる。「この追体験、この内的理解の形式は、美という現象を通じてわれわれにあたえられる。美の現象においては、<内面> の世界と <外部> の世界のあいだの檻壁は取り去られる」。さらにまた、古典主義美学は主に芸術作品に目を向け、他方経験論美学は芸術鑑賞の主觀的心理に注目した。前者が芸術作品の論理学的定義を追究したのに対し、後者は心理過程を分析する。これに反しシャフツベリは、共に関心を示さない。「彼の目指すものは論理的概念構成でも心理学的記述でもない」。美はまったく別種類の起原と目標をもつ。「人間は美の觀想において、被造物の世界から創造する者の世界への転換を経験する。客觀的・現実的なものの総括としての宇宙から、この世界を形成した力、この世界を内的にひとつに結びつけている活動力への転回がここに生ずる」。そして似せて作られる小宇宙を創造する芸術家こそが、宇宙もまた彼が自らの内面に見出す同じ形成力によって作られたことを認識する。こうして、理性、経験と並んで、直観（全体から個々の存在へ進む <直観的知性> intellectus archetypus）という第3の原理がシャフツベリによって立てられる。これはプロチノスの「叡知美」理論に基づき、さらに芸術論に適用することでいっそうの意味をもたせている。芸術模倣は外面の模写に限らず、制作行為、生成過程の模倣を意味し、その生成過程に没入してそれを直接的に把握する能力が天才である。かくして、「今やはじめて天才の問題が美学理論の中心問題になるにいたった。論理的分析も経験的觀察も、いずれもこの問題に迫ることはできない。ただ <直観の美学> のみがこの問題の内容とその眞の重みを明らかにしうる」。天才概念の歴史では、まず天才は理性の最高の昇華とされ、また古典主義美学におけるブーウールのように精妙・繊細を天才の特徴となす立場もある。しかし、シャフツベリはその両方とも異なり、「天才の概念を單なる感覚や評価の領域、つまり正確さ (justesse)、感受性 (sentiment)、繊細さ (délicatesse)などの次元から引き離し、それに眞の意味で生産的、形成的、創造的な力の働く舞台を確保しようとした」。

* カントによって大成をみる近代美学成立の必須要件である諸論点、美と快との区別、感覚と直観との区別、私心なき快、美は感覚的・情動的刺激ではなく合目的的な形式世界の啓示であること、美と眞との、そして芸術と自然との新たな関係、直観と天才の概念——こうしたもののがシャフツベリの思想のうちに包含されている。

4, *Die platonische Renaissance in England und die Schule von Cambridge*

(序論)「ケンブリッジ学派の思想的営為を、過去に遡っては、イタリア・イギリス＝ルネサンスの哲学的な運動全体と結びつけ、未来に向かっては、18世紀の精神史総体と結びつける縦糸を示すつもりである」(邦訳——以下同, p. 28)。

——*イギリス思想史をイギリス経験論史と同一視する哲学史解釈に反対して、のちの18世紀思想の特質を導いたケンブリッジ・プラトニストの傾向を再評価する。その再評価によって、シャフツベリを介してドイツの近代思想が展開されていく、ヨーロッパ規模の思想運動のダイナミズムを正確に説明できるとする。

(第6章)ケンブリッジ学派の哲学者が非近代的と思われる原因是、その文学形式・文体が時代遅れのものだから。近代の哲学思想は、ベーコン、モンテーニュに先駆けられているように、「エッセイ」の形式で表現された。

——*シャフツベリによって、思想内容はケンブリッジ・プラトニストを継承し、その表現は近代的な「エッセイ」によることで、新たな展開が可能になった。

シャフツベリがケンブリッジ・プラトニストのスコラ哲学の外皮を突き破って、学説本来の道徳的宗教の核を純粹に取り出した。彼は、世界を審美的に享受する宗教をかける。「シャフツベリはイギリスが生みだした最初の偉大な美学者」「美学的形式の問題が総括的・根本的な基本問題となるのはようやくシャフツベリにおいてであり、芸術家の天分についての概念が普遍的な意味を獲得するのも、同様に、彼においてである。芸術的天才はすでに創造された自然を模倣するのではなく、宇宙自体の創造力を模倣する」(p. 159)。

——*シャフツベリの功績としての「美学的形式」、「芸術的天才」の概念が提示される。

「彼にとって形式とはたんに付属する外的的なものではなく、魂そのものを映しだす鏡であるので、あらゆる外的形式はこのように〈内的形式〉を映しだし証明するかぎりにおいてのみ、美しいと呼ぶことができる」(p. 160)。「ユーモア」と「滑稽」についてシャフツベリは、ユーモアをルネッサンス的に、つまり魂のもつ開放的な力、生命を授け形成する力として捉え直す。「ユーモアは学問の真摯さや宗教の尊厳に向けられるのではなく、誤った真摯さと不相応な尊嚴、つまり衒学と偽りの信心にのみ向けられる」(p. 174)。それらは精神の自由に対立する。

シャフツベリの「楽天主義」は通俗的な〈世界の快楽の総和は不幸の総和を凌駕する〉とするものではなく、苦惱に立ち向かい不幸に耐えようとするものである。「事物を支配している秩序を省察することによって、たんなる幸福への願望いっさいを超越させる、宗教のあの根本的感情が生みだされる。その省察は個別的ではなく全体を望むよう、そしてこの全体をわれわれのためではなく全体のために是認するようわれわれに教える。シャフツベリの宗教上のこの基本的考え方は、美学の分野における彼のもっとも重要かつ実り豊かな成果の出発点ともなっている。18世紀のドイツ美学がとりあげ、引き続いてメンデルスゾーンが発展させ、カントが体系的に解明し強化した〈無関心的快感〉の概念はシャフツベリに由来する。この概念を歴史的にさかのぼってその起源にいたらうとすれば、ここでもまたプラトンに注意を向けなくて

はならない。……」(p. 175f.)

——*「無関心的快」におけるドイツ美学への影響に注目すべきである。

報いと罰に依存しない倫理学、支配ではなく理解を求め、「経験論の〈実践的〉な理想、たんなる有用性の規範にたいして、彼は熱狂、靈感を対置する。われわれが宇宙を自由に直観できるようみずからを高めるならば、たんなる原因と結果の連鎖、たんなる手段と目的の連鎖は破壊されるにちがいない。この要求は認識、道徳、芸術において満たされねばならない」(p. 181)。「シャツベリの美学は、實際彼の自然学と倫理学におけるこの主要テーマ〔自然的共感；個人が全体になり、個人が純粹な没入で全体を捉える；外側からはこの世界に入ることができない〕から生みだされた」。「観照と没入というこの行為こそ、あらゆる芸術的な創造と喜びの基盤である」。「純粹認識の理念と〈報酬を当てにしない愛〉(amor non mercenarius)の主張はいまや有機的にそして内的必然性によって、〈無関心的快感〉の概念に成長する。そしてこの概念こそがシャツベリの〈内的形式〉の概念と相まって、18世紀美学の基礎を確立したのである」(p.184)。18世紀の美学的関心の高揚は心理学研究の成果ではない。経験論的体系の構造においては、美学は他の学問分野に匹敵する独立したものとは考えられていな。

——*シャツベリにおける美学の構造的成立の契機＝プラトニズム的觀想・（支配や統治でなく）純粹認識；無報酬の愛；無関心的快；内的形式。

美学はイギリス経験論ではなく、英國プラトン主義の基本的傾向から芽生え成長する。たんなる「感受性」ではなく、精神的自発性＝形成の創造過程こそが重要である。シャツベリがケンブリッジ・プラトニストたちの言説を理解できたのは、幼少の頃から古典の文芸作品・芸術作品に親しんできたからである。

——*ヒューマニズムの伝統上に構想された近代美学の觀念が提起されている。

プラトンのエロス説の根源的力が新しい時代によみがえった。それがドイツ精神へ影響を与えた。ヴィンケルマンは若い時からシャツベリを読む。古代芸術観に心酔し、芸術論にプラトンのイデア論を導入する。ヘルダーは、『神についての対話』『アドラステア』『人間性促進のための書簡』などにおいて、理神論への攻撃からシャツベリを擁護し、彼を哲学的文体の大家として尊敬する。「ヨーロッパの愛すべきプラトン」とシャツベリを呼ぶ。ゲーテは「内的形式」や自然贊歌においてシャツベリを継承する。シラーは美学においてカント（義務概念）とシャツベリ（調和；道徳的優美）との知的調停を図った。「かくてシャツベリのプラトン主義は今や新しい知的媒介のなかで復活し、ドイツ觀念論の哲学と美学が生まれる根本的動因の一つとなった」(p. 187)。「ケンブリッジ学派はいわば精神の仲介役、時代の仲介役である。イタリア・ルネサンスから18世紀ドイツ人文主義へと通じる橋の橋脚の一つである」(p. 188)。——*ヨーロッパ精神の真髓としての人文主義の歴史的な連続をたどる立場から、ケンブリッジ・プラトニズムとシャツベリとを評価し、その延長上にシャツベリによって構想された近代美学を位置付ける。

7, *An Essay on Man*——第9章「芸術」(原書, p. 162; 邦訳, p. 230f. においてシャツベリーに言及)

人間を「象徴を扱う動物」(animal symbolicum)と規定したうえで、人間の省察能力や意志が動物の単なる反応行動と異なって多様な文化を産み出した。象徴創出と操作活動が文化の創造を可能にした。(＊さまざまな文化現象、神話、宗教、科学、言語、歴史、そして芸術について論ずるなかで、シャツベリーの名はわずかながらあるが、芸術論の章で言及される。) 芸術は、現象の最高瞬間を、概念ではなく直観によって固定した、自律的で独自の世界を創造する。美的自由はストア的無感情ではなく、我々が感性的な形象世界に生きることで单一の情動ではなく生命の動的過程そのものの絶えざる変動(喜悦と悲哀、希望と恐怖、高揚と抑鬱)と動搖を意味する。熱情に美的形式を与えることは、熱情を自由で積極的な状態に転化することである。芸術家の作品において、熱情の力それ自体が形成力と変じる。シャツベリーによる芸術哲学への寄与のひとつは、美的経験において鑑賞者は芸術家の感情と共感するだけでなく、彼の創造活動に入りこまねばならないことを強調した点にある。「シャツベリーの精神及び理性に対する賞讃は、啓蒙主義の主知主義とは甚だ異なったものであった。美及び自然の無限の創造力に関する彼のラブソディーは、18世紀の知的な歴史における全く新たな特性であった。この点において、彼はロマン主義の最初の闘士の一人であった。しかし、シャツベリーのロマン主義はプラトン型のものであった。美的形相に関する彼の学説は、プラトン的概念であり、これによって彼は、英國の経験主義者の感覚主義に反抗し、抗議するに至ったのである」(邦訳, p. 241; 原書, p. 162)。

2, "Shaftesbury und die Renaissance des Platonismus in England"

[Eggers & Mayer, *Ernst Cassirer*, p. 76f. の要約の訳] 「シャツベリーによる、学問・宗教的問題における＜嘲笑の試練＞(test of ridicule)の推奨は歴史的分析への挑戦と見なす。18世紀イギリスの経験論とピューリタニズムとの概観によってわかるることは、両者の根本的違いにもかかわらず共に実践主義(pragmatism)の態度、自然的物質的世界の支配への意志を共有していることである。シャツベリーは彼の時代にあって古代への志向を持っていたほとんどただ一人の思想家であった。運命予定説と原罪の教義に代えて、彼が主張したのはプラトン的エロスとストア派の自足の考え方(praeium virtutis virtus ipsa)である。眞の宗教は奴隸的恐怖からではなく、自由と確信(affirmation)から生まれる。シャツベリーの最善説は存在の悲劇的側面に目を閉ざしているものではないが、幸福の量で人生を価値付けることはせず、むしろ人生を、自由な個人が内的形成の行為において人生に与える意味によって評価する。宗教的世界觀の基礎としてシャツベリーはユーモアに立ち戻るが、それはルネサンス以来の世界像(Weltbild)におけるユーモアの役割について問い合わせ立てることになる。アリオスト、ラブレ、セルバンテスなどの著作において、ユーモアは解放の手段として作用している。世界は自由な遊びにおいて破壊されるが、しかし、敵対心によってではなく、変容と愛のプロセスにおいて破壊されるのである。シェイクスピアにとっては、喜劇と悲劇の区別はまったくなく、

ユーモアは世界の中心をなす。シャフツベリは依然としてルネサンスの根本的力とつながっている。体系的美学の発見は、新たな宗教性の形態を介して彼のものとなる。<無償の快> (gratuitous pleasure) (interesseloses Wohlgefallen) とは、彼の <無償の愛> (gratuitous love) (amor non mercenarius) 概念の延長であり、その概念に彼の宗教を基礎付けた。この思想は、ドイツにおいてメンデルスゾーン、モーリツによって採用され、カントの判断力批判において体系的な完成に達した。

美学的な展開からまた、新しい自然観が生まれる。ベイコンによって確立された、自然の知識の技術的 ideal (technical ideal of knowledge of nature) に対抗して、シャフツベリは、生産と形成の過程での自然との一体視 (identify with nature in the process of procreating and forming) を求めている。その結果、彼の美学でもっとも重要な概念である <内的形式> が導出される。この概念に18世紀美学は依拠している。観念がもはや <印象> の帰結や写し (consequence and copy of the impression) と見なされずに、表現の根源的で自立した作用 (original and independent act of expression) と見なされる場合に限り、美学は登場し得たのである。シャフツベリはこの転回機を画し、天才理論の根底を提供する。ドイツの思想史はシャフツベリから重要な刺激を受け、彼の著作はヴィンケルマン、ヘルダー、ゲーテ、そしてシラーに影響を与えた。」

5, "Schiller und Shaftesbury"

[Eggers & Mayer, *Ernst Cassirer*, p. 92f. の要約の訳] 「17世紀イギランドの経験論とシャフツベリの根本的思想との距離と18世紀ドイツの古典的著作における美学理論との類似性について説明。彼の著作がドイツの哲学と思想史に与えた影響と、イギランドにおける受容との顕著な対比。ライプニッツは『諸特徴』の価値をただちに認めた。しかし、シャフツベリの諸思想はクリスチャン・ウォルフによる、18世紀ドイツにおけるライプニッツ哲学の一般化した形態のうちには含まれていない。そこで、シャフツベリの思想は、なんら哲学体系とは独立して新しく芸術を理解しようとした人々によってよりよく知られるようになった。ヴィンケルマン、ヘルダー、ゲーテ、シラーらがそうである。シャフツベリによる公式 <一切の美は真である> と、いわゆる <機械論的> 自然哲学の一切の体系への反対は、<能産的自然> (natura naturans) としての自然是それ自体創造的力であり <造形原理> (plastic principle) を含む、という事実によって説明される。そこで、美は自然の所産の内に留まらず、その創造過程に参与することで初めて理解できる。それゆえ、<詩人は実際第二の製作者であり、ゼウスのもとの正しいプロメテウスである>。シラーの初期の著作である『ユリウスの神知学』(*Theosophie des Julius*) は、ライプニッツの思想に支配されてはいるが、その叙情的で熱狂的調子 (dithyrambic) の文体において、シャフツベリの芸術哲学の影響を示している。後に、シラーは、シャフツベリの倫理学と一線を明確に画したカントの批判哲学と対立する。しかし、シラーの <美しい魂> (die schöne Seele) の美学的 ideal は、シャフツベリの <道徳的優美> の観念に基づいている。シラーは、現象世界と観念世界 (noumenal world) との根本的な差異があるこ

とを否定しなかったが、その両世界を自らの中で統一することが個人の課題であると見なした。彼は自分の美学理論において、自然と自由との和解を見出したと信じている。人間に要求される全体性は、理論理性や実践理性のどちらか单一では達成され得ない。芸術の分野に於いてのみ、そこでは人は自分の遊戲衝動 (Spieltrieb) に支配されているのだが、全体性は可能となる。シャフツベリにおいてもまた、美は、可視世界と観念の純粋世界との橋渡しを提供するものであった。人間のみが美の知覚を可能にする。なぜなら、動物はその必要の連関によって、周囲の事物に繫縛されているからである。美の世界は、所有欲ではなく、純粋な観想にのみ姿を現す。シャフツベリとシラーとの理論的関係は、比較文学と一般的な思想史の重要な1章を示す。というのも、次にシラーの思想は、コールリッジを介してイギリスに還流するからである。それは偶然ではない。なぜなら、コールリッジもまたケンブリッジのプラトニスト派に影響を受けていたからである。」

8, "Ficino's Place in Intellectual History"

フィチーノの観想行為の概念は、彼の神論、存在と思惟の理論、人間靈魂論、道徳論、芸術論、宗教論において決定的な觀点となっている。観想行為は（プラトン＝弁証論者、プロチノス＝神秘家、アウグスチヌス＝キリスト教思想家、に共通に）叡知界へ至る入り口である。フィチーノでは、この三者の説が融合している。新プラトン的一体化 (henosis) と单一化 (haploos) にはフィチーノが受け入れることができなかった要素がある。それは、靈魂は世界を超えるが、しかし、自己自身を超越できない、ということである。彼にとって観想的態度はたえずそれ自身の内で完了するものであった。自然への彼の関心は審美的であって、理論的あるいは科学的ではない。むしろ彼は、人間精神の活動力 (=精神を神に似たものにする) と自発性に力点を置いた。中世の思想家たちが、人間の堕落によって靈魂も〈anima recta〉(正直=せいちょくなる魂) から〈anima curva〉(歪んだ魂) になったと説くのに対し、しかし、人間靈魂の偉大さ (=神の像を帯びていること) は堕落後も持続するとフィチーノは考えた。ルネサンスの思想家は人間の眞の尊嚴を彼の創造性に、とくに人間的な特徴を有する表象を生み出す能力にある、とした。文化は神の賜というよりもむしろ人間の為せる業である。中世の神秘主義には、人間の学知に対する深い不信があり「恥すべき知識欲」(turpis curiositas=クレルヴォーのベルナール) と非難された。ルネサンス哲学ではヒューマニズムの影響で、こうした中世的觀念はなく、古典古代の復活は、超自然的援助が無くとも人間が自分自身の宇宙・文化を築きあげられるという自信につながった。文化世界において、諸藝術と学問の宇宙において、人間の尊嚴と偉大とが明確に証明された。「人間の技芸は自然自体が作成するものが何であれ、あたかもわれわれが自然の奴隸ではなく、その競争者であるかのように独力で作成する」(フィチーノ『プラトン神学』)。

クリステラーがフィチーノの思想史的位置を探る際に、彼の注釈・翻訳を介して後世の18世紀末に至るまで、プラトンとプロチノスの影響を与え続けた、と考えるのを承けて、その際重要な概念は「内的形相」であると言える。それはプロチノスが感性界の美を説明するときに使

う概念である。感覚美と超感覚・知的・神的美との間にある類似は何か。感覚美は「分有」によって美である。物は本性上、形の介入を嫌う。形はそれ自体で統一を構成する全体となる。物の本体に内在するものが本体を超えて形と調和的に統一されるかというと、ちょうど建築家が外面上の組立を彼の魂の構造に適合させて美しい建築を作ると似ている。外的建造物は石材を除去されると、外面的な塊とは区別されているが、実際は多面を見せながら、分かちがたく存在する、あの内的形相だけとなる。(cf.『エネアデス』1.2) この美の理論はフィチーノに繰り返し現れて、近代哲学へと伝えられる。ケンブリッジ・プラトニスト、シャフツベリ、ヴィンケルマン、ヘルダー、ゲーテ、ヴィルヘルム・フォン・ファンボルト、シェリング(『ブルーノ』『造形芸術と自然の関係について』), ヘーゲル(『美学』)などがその成果である。

[III] カッシーラーによるシャフツベリ受容・評価の論点総括

ルネサンス研究の大家でもあったカッシーラーは、当然のことながら、西洋文化の精神的根幹のひとつにプラトニズムの伝統をみる。文献8の書評は、そうした視点からのフィチーノの意味付けであり、その延長にシャフツベリも捉える。シャフツベリへの関心は、イギリス思想の本質は経験論という通念の修正を必要として、文献2と4におけるように、イギリスにおける近代のプラトニズムの流れを確認して、ケンブリッジ・プラトニストたちとそれに影響されたシャフツベリの位置を浮き彫りにする。一方、ドイツ近代精神はイギリスとは異なり、はあるかにプラトニズム的な精神をもっている。それは自由と形式との対立を止揚しようとする思想課題の解決において力を発揮する。その研究成果が文献1において示されている。さらに、シャフツベリとの関係でシラーを論ずるのが文献5である。そのような思想運動の近代におけるダイナミズムは、近代美学の成立をも含んで啓蒙期において顕著に見られ、文献3においてカッシーラーの啓蒙思想論が展開される。以上のような雄大な思想史研究は、文化哲学において人類の発展史を見るカッシーラーならではの業績であり、その簡約化された、入門書的な役割を文献7は果たしてくれる。また、文献6については、ある地域的な思想家を西欧思想の流れで捉え直す、ある種ケース・スタディのようなものと言えよう。

以上の総括に即して、1) プラトニズム、2) 美的形式、3) 近代美学、4) 文化哲学と芸術、という4つの側面からカッシーラーによるシャフツベリの評価を整理することができる。

カッシーラーによる近代美学の評価は、西洋思想史研究をふまえたうえでの洞察に基づいている。すなわち、ルネサンス以降のヒューマニズム(人文科学)の歴史的展開にみられる、一方でプラトニズムの伝統と文化(=教養)学の流れをまず見据え、そして他方で、近代哲学におけるライプニッツ哲学の成果であるモナド論や最善説を積極的に位置付ける。シャフツベリはその両者を美学的に展開した思想家として評価されるのである。私の見るところ、通常の美学史の叙述は、シャフツベリを近代美学史において位置付けようとする際に、ドイツのバウムガルテンの「美学」からカントの「判断力批判」の系列においても、また、イギリス心理分析学派の美学においても、結局シャフツベリを捉えきれず、彼の位置付けに挫折し、結果的に無視してしまうことに陥っている。それに対してカッシーラーは、ライプニッツ評価からシャフ

ツベリを見事に位置付けて近代美学成立の思想的必然性を明確にする。モナド論をその形成のエネルギーの視点から捉え、感性を単に理性に劣る前段階の能力とするのではなく、また、観念形成の予備段階として外界からの印象受容のための器官とみなすのではなく、まさに現実の必然的表現として感性的認識やその論理を捉え、美学の意義を称揚する。

こうして理解されたシャフツベリの美学は、ロマン主義的色彩の濃いドイツの美学に影響を与え、思想的継承者を得ることになった。ヘルダー、ゲーテほかの個々の美学思想との近似性、影響関係については、個々の研究課題となる。が、少なくともカッシーラーの近代美学成立についての包括的な研究は、あらためて美学史上のシャフツベリの位置と功績を明らかにしていく。

(本稿は平成7年度・8年度文部省科学研究費補助による研究成果の一部である。)

(原稿受理1996年12月13日)